九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

弱フェイズに関する考察 : 素性継承の拡張

大塚, 知昇

https://hdl.handle.net/2324/1500467

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式６－２）

氏　　名	大　塚　　知　昇
論　文　名	On Weak-Phases: An Extension of Feature-Inheritance
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　西岡　宣明 副　査　　九州大学　　教授　　大橋　浩 副　査　　九州大学　　教授　　久保　智之 副　査　　長崎大学　　教授　　稲田　俊明

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

生成文法理論のミニマリストプログラム（MP）における文の派性単位に関するフェイズ理論では、強フェイズと呼ばれるものが派性を駆動し、音と意味に情報を送る単位として機能するが、受身文、非対格構文においては強フェイズとは異なる弱フェイズと呼ばれる動詞句(vP)を想定せざるを得ない。本論文は、先行研究における弱フェイズ分析の問題点を「弱フェイズの矛盾」として明確に論じ、それを解決する独創性の高い分析により、一致と移動に関わる様々な現象ならびに、諸現象における随意性の問題を解き明かした斬新で極めて実証的な研究である。

第 1 章では、本論文の理論的位置づけと意義を概説し、第 2 章で、理論的背景である素性照合、フェイズ理論、解釈不可能素性と素性継承、A/A バー移動の概念を概観した。

第 3 章では、本論文の主要な問題となる弱フェイズの矛盾とその解決策を提示した。まず、伝統的に弱フェイズとして分析される vP の A/A バー移動に関する矛盾点と先行研究の問題点を指摘した。そして、強フェイズの主要部から弱フェイズの主要部への現行の素性継承を拡張した「素性転写」操作を独自に提案し、経済性の観点から、「同時的派生」と「個別的派生」の 2 つの可能性が導かれることを示し、独自の格付与分析と組み合わせることにより、2 つの派生が様々な文法現象の随意性を的確に捉えることを示した。

第 4 章以降で、素性転写の枠組みのもと、まず動詞句の弱フェイズに関わるスカンディナビア言語に見られる屈折と移動の関係性、英語の Th/Ex と呼ばれる現象、日本語の可能文におけるヲ/ガ格交替とそのスコープ解釈に関する現象、英語の二重目的語構文における移動現象を説明し、素性転写理論の経験的妥当性を示した。

第 5 章では、節における弱フェイズ分析を行い、英語のアイルランド方言の ECM 構文に見られる特異な遊離数量詞の振舞い、日本語の目的語繰り上げ構文におけるガ/ヲ格交替、西フラマン語に見られる補文標識一致等、現行の素性継承理論で問題となる現象を説明した。

第 6 章では、MP で現在最も注目されている「ラベリング」の分析を前置詞句における弱フェイズ分析と組み合わせることにより、「付加詞の島」の問題を解き明かした。さらに、英語の左方移動における前置詞残置/随伴の選択性、右方移動における前置詞残置の不可能性を説明した。

本論文の最大の特徴と利点は、最先端の理論的考察を深め、従来の研究の問題点を克服する分析の提案により、一見無関係と思われる様々な現象を統一的に解き明かし、理論的考察の妥当性を見事に実証した点にある。本論文は、今後のフェイズ理論研究の方向性を示したのみならず、従来のアプローチではうまく説明できなかった現象そのものに対する理解を深めた重要な分析として、生成文法における理論研究に大きな貢献をするものと高く評価できる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。